

<書評>

ガブリエル・アンチオープ著 (石塚道子訳)

『ニグロ、ダンス、抵抗
—17～19世紀カリブ海地域奴隷制史—』

(人文書院 2001年 314頁 ISBN4-409-03062-0 2,700円)

森本恭代



本書は、Gabriel Entiope, *Nègres, danse et résistance: la Caraïbe du XVIIe au XIXe siècle*, (Paris: Ed. L'Harmattan, 1996) の邦訳である。ガブリエル・アンチオープは、日本では本書の前編となる『<複数文化>のために——ポストコロニアリズムとクレオール性の現在』の著者のひとりとして知られる、カリブ海地域史を専門とする歴史学研究者である¹。また、訳者である石塚道子は、現在、お茶の水女子大学教授。文化地理学・カリブ海地域研究を専門とし、同じく『<複数文化>のために』の著者のひとりである。

「問題はニグロなのだ」——その全体を象徴する端的な一文からはじまる本書は、ダンスという文化的行為をめぐる言説に焦点を当てることで、植民地における近代奴隷制とその複層的な社会構成のプロセスを論じていく。タイトルが想像させるであろう「ニグロのダンス」の舞踊史研究でも、奴隷制の変遷をたどった制度史でもない。本書の力点が置かれているのは、17～19世紀という近代国家の黎明期にあって、カリブ海地域を舞台に、いかにダンスという行為=文化表象を通じて人種や民族、ジェンダーが配置され構成されてきたかを析出すること、そしてさらに、支配と従属のなかに生きてきた奴隷=ニグロにどのような抵抗の道筋があったのかを明らかにすることである。

全体の構成にそって、その議論を概観していこう。本書は四部からなり、第一部では、カリブ海地域のエスニックな構成の見取り図が描かれる。先住民とカリブ(黒)人の混淆、ヨーロッパ系人の入植、そしてアフリカ系人の強制移民まで、カリブ海地域のエスニックな歴史は混淆とヒエラルキー形成のプロセスである。だが、こうしたヒエラルキーは、単に人種に輪郭づけられたものではなかった。ヨーロッパ系植民者のなかには白人契約移民(契約奴隷)が数多く含まれ、また、植民地におけるヒトの再生産のために白人女性契約移民が求められた。黒人であれ、ヨーロッパ系白人であれ、カリブ海地域における社会的カテゴリーは、一枚岩の人種のカテゴリーには還元できないのである。

第二部は、ヨーロッパが黒人=ニグロのイメージを創出し付与してきた過程、言い換えれば、今日まで影響をおよぼす人種差別イデオロギーがいかにして構築されてきたかに焦点が当てられる。17世紀のフランスでは、黒人はかならずしも「人種的に白人より劣っている存在」を意味しなかった。フランスはアフリカを知らず、黒人、ニグロはカリブ海地域において「発見」され、人類学・民族誌的な関心の対象となった。それは非ヨーロッパ的な存在、すなわち「野蛮」で「未開」な「文明化」されねばならない存在として描出されたにとどまったのである。

だが、18世紀に入ると、黒人は奴隷でありニグロ種であるとみなされるようになる。「不自由で隷属させられた者」を指す「ニグロ」は黒人になり、「劣等な人種」を意味するようになった。黒人=ニグロは、動物のアナロジーによって記述され、植民地経営の有用な道具として扱われ、奴隷貿易と奴隷制を合法とする本国の教会や啓蒙思想家らの権威によってその正当性が支えられた。だが、経済利益を追求する一方、19世紀には博愛主義の高まりによって奴隷貿易は廃止され、奴隷制は大きく揺らぐことになる。しかしながら、この揺らぎこそが奴隷制の維持とその正当化を煽り、人種差別イデオロギーの生産・強化をうながしてゆく。当時のニグロのダンスは、「動物的興奮」「非文化的ふるまい」とも主張されたのであった。

第三部では、植民地社会における人種的混淆とその制度化、また「色」「色調」の分類がもたらす社会関係の緊張と混乱が明らかにされる。ひとくちに「白人」と言っても、富める者／貧しい者のヒエラルキーは厳然と存在し、植民地で生まれ育った者は「クレオール（植民地生まれ）」として本国人とは区別された。また、有色人には解放奴隷やその子孫である有色自由人が「雑種」として含まれ、カリブ海地域社会においては白人=支配者／黒人=奴隷という二分法は混乱し、内在的に破綻していたことがうかがえる。

さらに、社会的混乱を助長しかねない人種的混淆を回避すべく混淆婚が禁止され、「ニグロ女性」の性的奔放・放埒を主張する人種化されたセクシュアリティ言説が喧伝される一方、白人男性による黒人女性の強姦は日常的な権力行使のひとつにすぎないとみなされた。他方、白人女性とニグロ男性の性関係はタブーとされ、この禁忌を破った両者に厳罰が課せられたケースが取りあげられる。植民地社会における人種とは、単に黒人／白人の二分法によって分割されるのではない。そこには人種のジェンダー化が認められるのである。

最後に第四部で主題とされるのが、ダンスである。民族誌的な観察や記述には回収できない、ダンスのもつ多義性がここで明らかにされる。筆者は、ダンスには「レクリエーション=娯楽」としての側面と「レクリエーション=再創造」の側面があると言う。「ダンス狂」のニグロに、娯楽としてのダンスを許容することは「好意」とされた。それは奴隷主にとってニグロを「長生き」させコストを抑える経済合理性に基づく「好意」であり、また、叛乱を防ぎ社会的に統合する有効な手段とみなされていたにすぎない。ダンスが催される空間は身分を可視化し、その差異を画定し続ける政治・社会的な戦略の場でもある。だが一方、再創造としてのニグロのダンスは、(仮構された)起源としてのアフリカ文化を再創造する試みであったとともに、ヨーロッパにもアフリカにも回収できない新しい文化創造をも意味していた。ダンスはニグロと白人とのあいだに、文化的混淆をうながしたのである。

さらに、ニグロのダンスはニグロの自由への希求、抵抗の一形態でもあったことが主張される。抵抗とは叛乱やプランテーション外部への逃亡だけではない。ダンスを通じて自らの身体空間に逃亡すること、身体を通じて他者とのコミュニケーション空間を拓くこと、これらもまた抵抗なのだと言筆者は言う。プランテーションごとに隔絶した環境のなかで生きるよう強いられたニグロが、ダンスを通じて対話をはかる空間を創出すること。それは、ダンスが娯楽や祝祭にかかわるふるまいであった以上に、政治的・社会的・文化的なニグロの主体化を賭した行為なのである。

ダンスを主題としてとりあげることで、本書は、ダンスの多義性がその身体を媒介とした行為・運動を意味するにとどまらず、複層する位相に埋め込まれた言説によって構成されてきたことを明らかにし

た。筆者の強調点は、こうしたニグロの従属や収奪を「嘆き」によってではなく、「悲劇」に回収し尽くされない具体的存在の生身にまで踏み込んで、その存在のありかをすくいあげようと試みたところにこそあるだろう。ダンスが文化行為であるという意味は、それが行為として投げ出される瞬間、否応なく他者とのコミュニケーションを媒介する場をつくっている（つくってしまった）のだ、という主張として読むことができる。

植民地統治者にとって、ニグロのダンスは不穏な集合行為であったものの、ダンスへの欲求をよく統制し許可を与えることには利点があるとみなされた。ダンスは支配者にとっては安全弁を、ニグロにとっては抵抗の基盤や残余としての自由を意味する、両義的な行為であった。だが、ニグロによるその他のささやかな抵抗＝行為は、ダンスとは全く異なる位相においても表出され、おそらくはかなり隔差を帯びた抵抗として着地したのであった。

抵抗のひとつの手段に、ニグロ女性の墮胎が紹介されている。それは「自己の民族のひこばえを、屈辱や人間的墮落、人間として十二分生きられない人生にゆだねるよりはと、決然として摘むことを選んだ」姿である（p. 221）。筆者はこうした抵抗の戦略を称揚してこう述べているわけではない。ひたすら過酷な状況のなかで、生身の剥き出しの存在となったニグロがその身体と存在を賭した抵抗、逆説的な意味での抵抗に踏み出した姿が描かれたにすぎない。植民地奴隷制の暴力は、生命を賭した抵抗によって乗り越えられようとしたのであろうか。種の再生産をおこなわないこと、自殺すること、それは逆説的な意味での抵抗戦略ではあった。

だが、ニグロの抵抗だけが身体を焦点化していたわけではない。国民国家と植民地における「色」の分類や人種言説は、身体をターゲットとして構成されているとみることができる。植民地と国民国家の近代は、身体をとりわけ人種と民族、ジェンダーによって社会のなかに秩序づけ序列化していく。先にも触れたように、白人女性とニグロ男性との性関係は植民地社会のタブーであったし、奴隷労働力人口を確保するための生殖力は重要な関心事であったのである²。

こうした植民地における身体——人種や民族、ジェンダー——の配置構成は、また近代の学問・知識の編成過程と結びついてきた。ニグロを人種として「発見」する人類学・民族誌的知識の動員や、「肌の色」の濃淡にもとづく分類は、経済的利益のいかんにとどまらず、国民国家が植民地を参照することでより強力であることを指向したネーション建設の過程を想像させる。ヨーロッパの学問や知識は、その内部で植民地文化の「発見」に先行し活用されたと言うより、むしろ植民地—本国の関係のなかで醸成され、鍛えあげられてきたものではなかっただろうか。

だが他方で、カリブ海地域の特徴である人種的混淆が、リジッドな分類体系を困難にしてきたことには留意しておく必要があるだろう。人種的混淆は遺伝学的な「組み合わせ対照」で分類されるが、同時にこの混淆は可視的な「雑色」によって序列化され、「黒」から「白」への濃淡という「色調」がその地位に強く関与していた。学問や知識が社会分類の正当性を支える権威と特権の根拠として期待されたにせよ、カリブ海地域社会の「異種混淆」の現実、そこから逸脱する可能性をつねにはらんでいたのである。

本書は、筆者自身が強調しているように、ニグロのダンスを主体的な抵抗の一形態としてとらえることで、抵抗という概念を歴史的に問い直し、無力なニグロ像に対する一定の歴史的修正をもちこむことに成功した。それが、従来の歴史学や植民地論への批判的対話であろうことも読者には伝わってくる。

また、困難を極めたとする史料の発掘や分析を通じて、植民地奴隷制社会の配置構成に一定の見取り図をもたらした貢献は大きい。丁寧に観ることの重要性は言うまでもないが、まさしく「異種混淆」の言説や分類に分け入り、再構成してみせた手さばきには敬意を表したい。

ただし、こうした史料上の困難を少し棚上げさせてもらうならば、ダンスにおいてジェンダーがどのように構成され、その抵抗の意味や戦略にどうかかわっていたのか、もう一步踏み込んだ分析を求めたいところだ。また、とりわけ19世紀以降の博愛主義言説がカリブ海地域奴隷制にどのような影響を与えたのか、フランス本国と植民地社会の思想や制度、社会の変化はどのように関係し、あるいは連動している／いないのか、その続編を読みたい、知りたいという気になってくる。これはいささかわがままな読者の要求であるかも知れないが。

「問題はニグロなのだ」——本書の冒頭に掲げられたアンチオーブのことばに戻ろう。本書を読み終えてこのことばに戻るとき、読者ひとりひとりはこのことばを自分なりに解釈し、生かす楽しみが手渡されるように思えるのではないだろうか。

(お茶の水女子大学ジェンダー研究センター研究機関研究員)

注

1. 複数文化研究会編『＜複数文化＞のために——ポストコロニアリズムとクレオール性の現在』人文書院、1998年。
2. 植民地司祭は「母性愛」に満ちていたはずのニグロ女性の墮胎を「神」の名のもとに断罪したが、だからこそ彼女らの闘争は強力な「抵抗」でもあった（本書 p. 221）。